

## 国語

法学部・経済学部・経営学部・文芸学部・総合社会学部・国際学部・情報学部(英・国・数型)・短期大学部

〔一〕 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。 解答番号は〔一〕の 1 から 13 までとする。

インターネット上に建立された墓、「サイバーストーン」と呼ばれるプロジェクトがある。発案者である松島如戒によれば、その発想の原点には、ヒトを除くすべての生命体は、生を終えたのち、生態系に還元されてゆくのに、ヒトだけが死後、墓というスペースを占有しつづけることが許されるのだろうかという疑問があった。発展途上国の人口爆発とそれにとまなう食糧危機は「墓の爆発的受容」を意味し、食糧生産地が墓地に浸食されかねない。こうした問題意識から「お骨も墓石も墓地もない墓」サイバーストーンは誕生した。

それはインターネットのホームページに墓を作り、サイバースペースに死者の記憶を残すというアイデアである。遺された者たちは、このホームページにアクセスし、故人を偲ぶ。サイバーストーンは墓地の用地不足を解消するばかりでなく、墓守のいない無縁墓が生じることを防ぎ、遺骨のエコサイクルを可能にする、と松島は言う。遺骨は高温焼却炉で灰になるまで焼かれ、土に返されるので、お骨を納める土地も不要になる。松島が調べたところでは、摂氏千度以上の炉で焼かれた遺骸、つまり焼骨にはDNAはもはや存在しないものと推測されるため、焼骨によって死者を識別することはできない。したがって、骨はすべて灰にしまい、自然の生態系に戻す代わりに、個人識別が可能なDNAを含む毛髪を採取し、御髪塚に長期保存すればよい。将来、遺伝子配列が完全にカイセキされたならば、御髪塚すら不要となつて、サイバーストーンにその人固有の遺伝子配列を記録するようになるかもしれないと言う。

サイバースペース内の墓に蓄えられるものが文字、音声、画像、映像からなるマルチメディア的な情報であるのと同様に、御髪塚に保存されるものもまた、DNAという遺伝子情報である。いずれにしてもそこでは死者が解読可能な情報に還元されることを前提にしている。死者は A されるのではなく、あくまで情報として B されるのである。死者を個人として同定する情報のデータバンクが墓地に取って代わる。肉体はすべて焼かれて灰にされ、自然に返されてしまうのだから、墓や墓地は原則的に無用なものとなる。

① 大胆な「墓革命」であるとともに、これは墓地という死者のための空間を都市から消滅させる、ひとつの長期的な都市計画の提案でもある。墓地のない都市——しかし、そんな都市が実現したとして、われわれ生者にとって失われるものは何もないのだろうか。ジャン・ジュネは、そのような「都市計画」によって、われわれは「演劇」を失うだろうと言う。

urbanisme という奇妙な単語、教皇ウルバヌスの一人に由来するにせよ、あるいは都市というものに由来するにせよ、それが死んだ者たちを気遣うことは、おそらく、もうないだろう。生きている者たちは、こっそりとあるいは公然と、死んだ者たちを厄介払いするだろう、人がハレンチな想念を振り払うように。焼却炉へと彼らを追いやることで、都市化された世界は、ある大きな演劇的な救助を、そしておそらくは、演劇そのものを厄介払いするだろう。都市の——おそらくは中心を外れた——中心である墓地のかわりに、あなたがたは、煙突のある、煙突のない、煙の出る、煙の出ない、諸々の骨壺置き場を持つことになるうし、また、死んだ者たちは、黒焦げの小さなパンのように黒焦げになって、都市からかなり遠いコルホーズやキブツの肥料として利用されるだろう。

② この異様なテキストがそこで書かれた土葬が支配的な文化において屍体の焼却がもつ意味と、火葬中心の文化のもとにおけるそれとが異なっていることには留意しなければならない。ジュネにとって屍体焼却は、都市の「中心を外れた」中心、つまり文字通りの中心には位置しえない周縁的な場所ではあっても、都市にとって欠くことのできない空間である墓地の衰弱を物語っている。その衰弱が「演劇」という「救助」の喪失にキケツする。しかし、演劇の目的をキリスト教の暦の時間からの解放、すなわち「歴史的と言われているが実は神学的な時間から、私たちを逃れさせること」にあると考えるジュネは、土葬の文化的伝統に逆らい、「黒焦げの小さなパン」という「肥料」を生む火葬場に、演劇の新しい倒錯的な形態を見出すことになる。

とはいえ、もし火葬が——<sup>(d)</sup>ソウゴンに、ただ一人の人が火焙<sup>あぶ</sup>りにあつて焼き殺されるとか、都市あるいは国家が、ある別の共同体を、いわばひとまとめに厄介払いしようとするような——ある劇的な展開を見せるなら、火葬場は、ダッハウのそれのように、時間というものからは過去からも未来からも建築学的に逃れている、きわめてありうべき未来の姿を<sup>(e)</sup>カンキし、煙突は清掃班の手でつねに整備され、この班の人々は薔薇<sup>ばら</sup>色煉瓦<sup>れんが</sup>造りの勃起し傾斜したこの性器の回りりでリートを歌ったり、あるいはモーツァルトのメロディを正確に口笛で吹きならしたり、十から十二の死体をその火格子の上に一度に詰めこめる焼却炉の開いた口をさらに手入れたりする、そんな演劇の一形式が永続化されることになるだろう。

「ダッハウ」という固有名詞が示すように、死の生産工場としての強制収容所が、大量に、規則正しく、正確に反復する焼却こそが、神の受肉に始まり、最後の審判における復活の期待のうちに置かれたキリスト教的時間の支配下ではなく、過去も未来も欠いているという意味において、墓地なき時代の「演劇」なのだ。<sup>(3)</sup>ジュネによる演劇のこの過激な転倒に反映しているのは、ナチの強制・絶滅収容所における膨大な殺害屍体の焼却という犯罪行為が、復活の日に備えて身体を大地に埋め保存する文化に対して与えた衝撃であろう。

演劇は映画とテレビの出現以後の時代にあつて変質せざるをえない、とジュネは言う。かつてそれは、政治的あるいは宗教的関心のもとに、劇的行為を教育の手段にしていた。映画やテレビがその教育的機能を引き受けた結果、演劇は空っぽになつて純化される。では、こうして純化された演劇に残されたものとは何なのか。それは「場」である。そして、ジュネによれば、現在の都市で劇場が建設されうる「場」は「墓地」以外にはない。墓地に劇場が隣接するとき、あるいは墓地が劇場になるとき、観衆はそこを訪れるため、そこから帰つてゆくために、墓に沿った道をたどらなくてはならない。ジュネがそんな劇場をめぐるって思い起こすのは、ローマかどこかに存在した、葬列に先んじて進みながら、故人の人生のパントマイムを演じたという、「弔いのものまね師」のことである。このものまね師から「演劇」は生まれる。

死者を埋葬する前に、棺ひつぎのなかの死体を舞台の前景まで持つていく。友、敵、野次馬は、観衆用の場所に着席する。葬列に先んじていたものまね師は分裂し、大勢になる。彼は劇団になり、死者と観衆の前で死者を生き返らせ、再び死なせる。続いて棺は再び持ち上げられ、夜の夜中に墓穴まで運ばれる。ついに観衆は去っていく。

ジュネが演劇と呼ぶものの起源は死者の生の模倣ミメシスにある。この模倣ミメシスによって、死者を埋葬する前にもう一度生き返らせる営みが演劇なのだ。そこでは屍体もまた観客のひとりである。『リトレ辞典』によれば、表象、上演、代理をさす *representation* には、「喪の黒布で覆われた空の棺」の意味がある。演劇とは 10 としての舞台上で上演される、埋葬儀礼そのものの「ものまね」、すなわち代理にほかならない。

④ ジュネが指摘する埋葬と演劇との根源的な関係は、一八世紀末以降の近代ヨーロッパにおいてギリシア悲劇の神髄とされてきたソポクレスの『アンティゴネー』が、屍体の埋葬にかかわる劇であったことに表われている。この悲劇では、兄ポリュネイケスの屍体の埋葬を叔父のテーバイ王クレオンに禁止されたアンティゴネーが、その禁を破った罰として、生きながら墓穴のなかに閉じ込められる。つまりそこでは禁止による埋葬の遅延と生き埋めによる早すぎる埋葬という、適切な時機を得ることのできない埋葬行為の障害が主題になっていたのである。

(中略)

古代ギリシア人は「生命」という言葉でわれわれが意味しているものを表現する単一の単語をもたなかった。彼らは語源的には同一ではあっても意味の異なる二つの単語を使っていた。そのうちのひとつである「ゾーエー」は、あらゆる生命体について共通して存在する生命を表わし、もうひとつの「ビオス」は人間の個人ないし集団固有の特徴づけられた生の形式、生き方といったものをさしていた。アリストテレスの『政治学』にもとづいてジョルジョ・アガンベンは、古代ギリシアでは単なる自然的生命であるゾーエーはポリスからは厳密に排除され、再生産されうる生命としてオイコスの領域に限定されていたと言う。この二つの生命概念によって語るならば、ポリュネイケスはビオスの終わりである死のちにもゾーエーとしては生き

ており、そこにポリスとオイコスとの苛酷な衝突が生じたのである。

ミシェル・フーコーは『知への意志』において、古典主義時代以降のヨーロッパでは、権力のメカニズムがもはや君主がもつ生殺与奪の至上権によってではなく、身体の規律と人口調整によって生をくまなく取り込むテクノロジーに依拠するような「生<sup>バイオ・プワイワール</sup>権力」が現われた、と主張している。近代人とは「己が政治の内部で、彼の生きて存在する生そのものが問題とされているような、そういう動物」にはかならない。ここで言う生とは明らかにバイオスではなく、ゾーエーである。種である身体、生物学的な身体の繁殖や誕生、死亡率、寿命などを制御しようとする「生<sup>バイオ・ポリティック</sup>政治」<sup>⑤</sup>とはいわば、古代ギリシアにおいてはありえなかったであろう、ゾーエーの政治である。単なる生命であるゾーエーの政治化が近代を特徴づけている。

ポリスの生命としてのバイオスと単なる生そのものであるゾーエーとの矛盾を埋葬という主題をめぐって展開した『アンティゴネー』のうちに、ヘーゲルは、ゾーエーが属するオイコスを守る女の倫理とポリスを支配する男の法との対立を見た。本来、家族がおこなう最後の義務としての埋葬はポリスの関心事ではない。アンティゴネーの悲劇は、ゾーエーにかかわる領域<sup>エ</sup>にポリスの政治が過剰に介入した結果の産物である。ヘーゲルの読解は、政治的空間へのゾーエーの取り込みに対するアンティゴネーの抵抗に倫理的な正当性を与えた。それは古代ギリシアの都市国家アテネが、この悲劇の舞台上で上演＝表象される対立関係を通して、バイオスとゾーエー、ポリスの広場とオイコスの暖炉との区別をおのれが政治空間の基礎的分割としていった過程を、模倣的に反復しようとする身ぶりだった。そして、そのようなヘーゲルの解釈の背後にはおそらく、ますます政治化されつつあるゾーエーという、生政治のテクノロジーによる生権力の支配の拡大があった。ラカンがアンティゴネーに死の欲動の倫理を見るとき、この倫理が対置されているものもまたやはり同様に、人間を「生きさせるか死の中へ廃棄する」生権力であろう。

（田中純『死者たちの都市へ』による。ただし、本文の一部を省略した）

問一 二重傍線部①～⑤の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各項の中からそれぞれ選び、その番号をマークせよ。

1 ① インセキ辞任 2 移民ハイセキ

2 ② 人工トウセキ 4 一朝イツセキ

3 ③ レンカ販売 2 レンキン術

4 ④ ヒレン物語 4 ジュクレンの技

5 ⑤ キドウ修正 2 キカ申請

6 ⑥ キカン産業 4 キセイ緩和

7 ⑦ カイソウ御礼 2 避暑地のベッソウ

8 ⑧ 強制ソウカン 4 ソウダイな計画

9 ⑨ 辞職カンコク 2 仮名を漢字にヘンカンする

10 ⑩ 証人カンモン 4 勝利にカンセイをあげる

問二 空欄 A B に入る言葉の組み合わせとして、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

6 1 A 埋葬 B 保存

2 2 A 保存 B 記録

3 3 A 記録 B 識別

4 4 A 識別 B 解説



問三 傍線部①はなぜか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

7

- 1 墓地を無用にすることによって都市の人口問題を解消し、長期的な観点から食糧危機に対処する計画だから
- 2 弔いのかたちを刷新するのみならず、遺骸を生態系に還元するというエコロジ的な発想が原点にあるから
- 3 故人の痕跡をサイバースペースに移して土地を有効活用し、都市空間を大胆に再編するプロジェクトだから
- 4 死者が解読可能な情報に還元されうるという前提に基づいて、都市に不可欠な墓地を消滅させる構想だから

問四 傍線部②の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

8

- 1 土葬中心のキリスト教文化において、屍体の焼却は復活の日に備えた身体の保持を否定することになる
- 2 火葬中心の日本とは異なっており、ヨーロッパでは屍体を大地に埋めることが都市計画の中に含まれている
- 3 キリスト教の文化的伝統からすれば、屍体を焼却することは自然の摂理に反する行為と認識されている
- 4 ヨーロッパでは墓地の用地不足や衛生面の問題が深刻ではなく、屍体を焼却する必要に迫られていない

問五 傍線部③の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

9

- 1 都市計画を意味する *urbanisme* という言葉を転用して、都市から墓地が消滅した後の演劇を構想している
- 2 土葬が支配的な文化において、その伝統にあえて逆らうことで演劇を宗教儀礼から解放しようとしている
- 3 ナチによる犯罪行為の衝撃を受け止めつつ、死者の復活に備えて火葬場における演劇の再生を図っている
- 4 屍体の焼却が演劇の喪失につながると考えながら、その極限的な状況に新しい演劇の形態を見出している

問六 空欄 10 に入る言葉として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

10

- 1 喪の黒布の表象
- 2 生き返った死者
- 3 屍体を欠いた棺
- 4 空虚な墓の模倣

問七 傍線部④についての説明として、適切でないものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

11

- 1 屍体の埋葬をめぐるポリス（都市国家）とオイコス（家）の対立が主題となっている
- 2 死者の生を模倣的に反復することを通して埋葬と演劇の根源的な関係を具現している
- 3 自然的生命の領域への権力の過剰な介入に対するアンティゴネーの抵抗を描いている
- 4 生物学的身体と政治的身体の矛盾を家族の埋葬というテーマをめぐる展開している

問八 傍線部⑤にあてはまるものとして、最も適切なものを波線部ア～エの中から選び、その番号をマークせよ。

12

- 1 ア キリスト教の暦の時間からの解放
- 2 イ ナチの強制・絶滅収容所における膨大な殺害屍体の焼却
- 3 ウ 死者を埋葬する前にもう一度生き返らせる営み
- 4 エ 家族がおこなう最後の義務としての埋葬

問九 本文の内容と合致しないものを、次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

13

- 1 生政治のテクノロジーの拡大は、死者を劣化しないデジタルデータに置き換えて保存する発想につながっている
- 2 都市から死者を厄介払いした先にある強制・絶滅収容所において、埋葬行為の演劇性は生政治の空間と結びつく
- 3 権力による禁止に逆らって兄を埋葬したアンティゴネーは、生権力の支配への抵抗者として現代的な意味を持つ
- 4 古代ギリシアの都市国家におけるような政治空間の基礎的分割は、近代の生権力の拡大によって浸食されている



(二) 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。解答番号は「二」の 1 から 8 までとする。

行基菩薩ぎやうきぼさつはもと薬師寺の僧なり。俗姓は高階氏たかかしな、和泉国大鳥郡の人なり。わかくて頭をそりて、はじめて瑜伽論ゆがろんを誦ずす。すなはちその心を明らかにさとりぬ。あまねく諸国にあそびて、人をして法道のりのみちをしらしめて、仏の道におもむけて、仏法をおこなひつとめとして、行基すぐる所には家にをる人なく、競ひいでてをがみたまつる。あしき道にいたりては橋をつくり、堤をつきてわたし給ふ。よき所を見給ひては堂をたて、寺をつくり給ふ。畿内には三十九所、他国にも甚だはなはおほし。その寺いまにあひつぎてさかゆる事、いまにたえず。

あまねく雨のしたにありき行きて、利益せずといふ所なし。ふるさとに帰る時、ある人々池のほとりにあつまりあて、魚うををとりにくふ所あり。その前をすぐるに、いさめる人どもとらへとどめて、なますをつくりて、あながちにすすめ、しひてまゐらす。これをうけて口のうちにいれて、即ちはいきでたるをみれば、みなことごとくちひさき魚となりて、また池に入りつ。みる人おどろきて、戯れ②のとがをくゆ。かくのごとくにあやしく。

(中略)

また天皇ア東大寺を作り給ひて、供養くやう給はむずるに、講師かうしには行基菩薩を定めて宣旨せんじを給ふに、「行基はその事にたへずはべり。外国とくこより大師来たり給ふべし。③それなむつかうまつるべき。」と奏すれば、供養せむとするほどに成りて、摂津国セツツの難波なんばの津に大師のむかへとてゆく。即ちおほやけに申し給ひて、百僧をひきゐたり。次いでに行基は第百イにあたり給へり。治部ちぶ玄蕃げんぱん雅楽司うたのかき等を船にのりくはへて、音楽を調ととへてゆき向かふに、難波の津にいたりてみれば、人もなし。行基※関伽あか一具をそなへて、そのむかへにいだしやる。花をもち、香をたきて、潮の上にかぶ。みだれちることなし。④はるかに西の海にうかび行きぬ。しばらくありて、小船にのりて婆羅門僧正ばらもんそうじょう、名は菩提ぼだいといふ僧来たれり。関伽またこの舟の前にかぶて、みだれずして帰り来たれり。菩薩は南天竺なんてんじくより、東大寺供養の日にあはむとて、南海より来たれり。舟より浜によせておりて、たがひに手を取り、喜びあめり。行基菩薩まづ歌をよみてはいく、

※<sup>りやうぜん</sup>靈山の釈迦のみまへに契りてし<sup>⑤</sup>真如<sup>しんによ</sup>くちせずあひみつるかな

婆羅門僧正歌を返してはく、

※<sup>かびら</sup>伽毘羅衛にともに契りしかひありて文殊<sup>⑥</sup><sup>もんじゆ</sup>の御貌<sup>みかほ</sup>あひみつるかな

といひて、ともにみやこにのぼり給ひぬ。

〔三宝絵〕による。ただし、本文の一部を省略した

※講師……法会るとき、高座に登って経典を講説する僧

※閼伽一具……仏にそなえる清らかな水を入れる仏具（閼伽）など、供養に用いる仏具一式

※靈山……釈迦が説法を行った地である靈鷲<sup>りやうじゆせん</sup>山のこと

※真如……仏教における絶対不変の真理

※伽毘羅衛……釈迦の生誕地

1

問一 傍線部①の行ったこととして、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 行基に呼び止められて池の前で立ち止まった
- 2 故郷でも忙しそうなのを心配し食事をとらせた
- 3 行基を引き留めて魚の刺身を強引に食べさせた
- 4 魚の刺身を口にしたもののすぐに吐き出した

問二 傍線部②の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

2

- 1 僧に対してふざけた愚かな行いをしたことを反省した
- 2 高僧への悪ふざけに対する報いをくらうことになった
- 3 出来心から殺生の罪を犯してしまったことを後悔した
- 4 不思議な力で生み出された小さな魚を食べようとした

問三 空欄 3 に入る言葉として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

3

- 1 ゆかしき
- 2 あだなる
- 3 いぶせき
- 4 たへなる

問四 傍線部③の意味内容として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

4

- 1 私は外国から来られる大師にこそお仕えするべき者なのです
- 2 外国から来る大師が講師の役を十分にお勤めするはずです
- 3 私などは講師の任に当たらせていただくべきではありません
- 4 外国の大師を行基様の配下にお付けするのがよいでしょう

問五 傍線部④の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

5

- 1 外国の大師を迎え入れるために集まった人々の船は、行基の供えた仏具に守られつつ西へと進んだ
- 2 香とともに波の上にまかれた花は、乱れ散りながら潮に乗って遠い西の海へと流れ去ってしまった
- 3 闍伽一具をそなえて海に浮かび立った行基は波に乗って西へ行き、大師の舟を見つけて戻ってきた
- 4 行基が海に浮かべた仏具一式は、大師を難波津に導き入れるべく一そろいのまま西の海へと行った

問六 傍線部⑤と同じ働きの語を含むものとして、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

6

- 1 雪をうれしと思ひはべりしに、
- 2 なかなかなるもの思ひをぞしたまふ。
- 3 いかにせましと思ひて、のぞきて見れば、
- 4 とりたててはかばかり後見しなければ、

問七 傍線部⑥が指す人物として、最も適切なものを波線部ア～エの中から選び、その番号をマークせよ。

7

- 1 ア 天皇
- 2 イ 行基
- 3 ウ 菩提
- 4 エ 釈迦

問八 本文の内容と合致しないものを、次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

8

- 1 諸国を渡り歩いて仏法を説き土木事業も手がけた行基を民衆はこよなく慕った
- 2 天皇は東大寺建立にあたって行基を供養の講師に任じようとしたが固辞された
- 3 行基は前世に菩提と交わした堅い約束が果たされ無事に再会できたことを喜んだ
- 4 南天竺から来日した婆羅門僧正は東大寺の大仏の尊顔を拝する榮譽を歌に詠んだ

〔三〕 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。解答番号は〔三〕の 1 から 8 までとする。

私が大学に入学する頃、世間には大学に入るとバカになるという「常識」がありました。こうしたことを言うのは、世間で身体を使って働いている人たちでした。そうした発言の真の意味は、いまではまったくわからなくなってしまったと思います。座って本を読んでいると、生きた世間で働くのが下手になってしまふ。これはそういう意味だったはずです。こうした記憶があるから、私はいまでも身体を多少でも動かすのです。

座って机の前で学べることもたしかにあります。しかし応用が利くことは「身についた」ことでしかありません。

日本の教養教育がダメになったのも「身につく」ことをしなくなったからでしょう。

② 私が東京大学出版会の理事長をしていた時、一番売れたのが『知の技法』という本です。知を得るのにあたたかも一定のマニュアルがあるかのようなものが、東大の教養学部<sup>ニ</sup>の教科書で出て、ベストセラーになりました。

この本はなぜ売れたのか。知が技法に変わったからです。技法というのはノウハウです。どういうふう<sup>ニ</sup>に知識を手に入れるか、それをどう利用するかというノウハウに、知というものは変わってしまった。

しかし、教養はまさに身につくもので、技法を勉強しても教養にはなりません。ただ勉強家になるだけです。それを昔は「暈が腐るほど勉強する」と言いました。それでは運動をコントロールするモデルは脳の中にできありません。

知識が増えても、行動に影響がなければ、それは現実にはならないのです。江戸時代には陽明学というのがありました。當時の官学は朱子学で、湯島聖堂がその本拠地です。

<sup>はやしたいがくのかみ</sup>林大学頭という東京大学総長のような先生がいて、暈の上に座って、先生の講釈を聞く。朱子学にはそんなイメージがあります。

陽明学はそれとは違います。知行合一<sup>ちこういついつ</sup>を主張する。知ることと、行なうことは一つだ、一つでなければいけない。ここで言う知は文であり、行は武のことですから、文武両道と知行合一は同じことを言っています。

一般に、知ることは知識を増やすことだと考えられています。だから「武」や「行」、つまり運動が忘れられてしまう。

知ることの本質について、私はよく学生に、「自分ががんの告知をされたときのことを考えてみなさい」と言っていました。「あなたがんですよ」と言われるのも、本人にしてみれば知ることです。「あなた、がんですよ。せいぜい保<sup>も</sup>って半年です」と言われたら、どうなるか。

③ 宣告され、それを納得した瞬間から、自分が変わります。世界がそれまでは違って見えます。でも世界が変わったのでは

なく、見ている自分が変わったんです。つまり、

4

とは、自分が変わることなのです。

自分が変わるとはどういうことでしょうか。それ以前の自分が部分的に死んで、生まれ変わっていることです。

『論語』の「朝<sup>あした</sup>に道を聞かば夕べに死すとも可なり」という言葉があります。朝学問をすれば、夜になって死んでもいい。学問とはそれほどありがたいものだ。普通はそう解釈されています。でも現代人には、ピンとこないでしょう。朝学問をして、その日の夜に死んじゃったら、何の役にも立ちませんから。

私の解釈は違います。学問をするとは、

5

こと、自分の見方がガラッと変わることです。自分がガラッと変わると、

どうなるか。それまでの自分は、いったい何を考えていたんだと思うようになります。

前の自分がいなくなる、たとえて言えば「死ぬ」わけです。わかりやすいたとえは、恋が冷めたときです。なんであんな女に、あんな男に、死ぬほど一生懸命になったんだろうか。いまはそう思う。実は一生懸命だった自分と、いまの自分は「違う人」なんです。一生懸命だった自分は、「もう死んで、いない」んです。

人間が変わったら、前の自分は死んで、新しい自分が生まれていると言っているでしょう。それを繰り返すのが学問です。ある朝学問をして、自分がまたガラッと変わって、違う人になった。それ以前の自分は、いわば死んだことになります。それなら、夜になって本当に死んだからって、いまさら何を驚くことがあるだろうか。④『論語』の一節は、そういう反語表現だというのが私の解釈です。正しいかどうかはわかりません。



確固とした自分があると思ひ込んでいるいまの人は、この感じがわからない。むしろ変わることはマイナスだと思ひています。私は私で、変わらないはず。だから変わりたくないのです。それでは、知ることはできません。

でも、先に書いたように、人間はいやおうなく変わっていきます。どう変わるかなんてわからない。変われば、大切なものも違ってくる。だから、人生の何割かは空白にして、偶然を受け入れられるようにしておかないといけません。

(養老孟司『ものがわかんということ』による。ただし、小見出しを省略した)

問一 傍線部①の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

1

- 1 大学で学ぶと高校までの学習内容を忘れ去ってしまう
- 2 身体を使って働いている人からひがまれるようになる
- 3 バカ正直に働くことの重要性を見失ってしまう
- 4 座学の重視は、実社会での働きを下手くそにする

2

問二 傍線部②の事象を筆者はどのように思っているか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 自分が東京大学出版会の理事長だった当時に最大のベストセラーを生んだことを成果として誇らしく思っている
- 2 自分が東京大学出版会の理事長だった当時のベストセラー刊行を営利主義に走ったと受け取られるのを嫌っている
- 3 知をどこか手軽なノウハウに変えてしまう傾向を黙認して先導した張本人と見られることをもっぱら恐れている
- 4 簡単に知識を手に入れるための技法が知であると思わせた本がベストセラーにもなったことを不本意に感じている

問三 傍線部③はなぜか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

3

- 1 がんの宣告で自身の死がリアルとなり、死後の準備を急ぐことになるから
- 2 寿命の宣告によって従来の当たり前だったことに終止符がうたれるから
- 3 死の宣告を受け入れ、余生にさらなる別の楽しみを求めることになるから
- 4 周囲の風景が一変することによって、生の意識が改まることになるから

問四

空欄

4

に入る言葉として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

4

- 1 見る
- 2 知る
- 3 宣告
- 4 世界

問五

空欄

5

に入る言葉として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

5

- 1 一皮むける
- 2 思い半ばにすぎる
- 3 驚天動地のような
- 4 目からウロコが落ちる

問六

傍線部④はどういうことか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

6

- 1 学ぶことを筆者は死を繰り返すことと捉え、それゆえ実際の死も動揺するほどのことではないと解すること
- 2 筆者の考えでは朝に学んで夜に死んでしまうのでは学びが無意味になるので、そんな解釈には反対であるということ
- 3 学問を人間の生死に直結させるのはどう見ても極端過ぎて、筆者としては違和感を覚えすにはいられないということ
- 4 どれほど学問がありがたくとも実際に命を落とすほどかといえ、筆者にしても簡単な問題とは思えないということ

問七 傍線部⑤の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

7

- 1 学ぶことは新たな謎の発見だから、将来を生きる上でその謎に対応する余力を残しておくことが不可欠だ
- 2 人生の先行きは不安定で誰にもわからないからこそ、先入観を持たず何事も決めつけないことが肝要となる
- 3 学びを通して生まれ変わったことを必然だと考えずに、余裕を持って新たな自分を受けとめる態度が必要だ
- 4 固定した価値基準に縛られることなく、学びによる自らの変容がいつでも可能になるようにしておくべきだ

問八 本文の主旨として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

8

- 1 真の教養とは暈が腐るほど熱心に勉強を続けて得られるものであり、学問をするとは死ぬ気で勉強することである
- 2 真の教養とは脳の中に運動を制御するモデルを作り出すことであり、学問をするとは世界の見方を磨くことである
- 3 真の教養とは知ることと行うことが一つになったものであり、学問をするとは自分自身が変わり続けることである
- 4 真の教養とは発言や行動を制御する哲学のもとで応用される知であり、学問をするとは知の本質を学ぶことである

(以下 余白)